

# 幼児をもつ親の成長

——母親の勉強グループの指導から——

高橋 滋子



。幼児といっしょにいるけれど

△「ママ、あっちゃんとっても気持ちがいいよ。お天気がいいね」

あっちゃんは五月の青い空をみあげてにっこりしました。

「ほんとにいいお天気なこと」

お母さんはまばゆいばかり光に満ちた空をみあげました。朝からずっといっしょにいたはずなのに、ナースリーにでかける日の忙しいこと、やっと学校の門に着いてほっとして、はじめてあっちゃんに出会ったような気がしたのです。

△「お母さん、広いね」

「大きいお姉さんたちべんきょうしているんだね」

「そうよしんちゃんも大きくなったら勉強するんですよ」

「うんようちえんにいったらね」

しんちゃんのキラキラ光る目をみてお母さんはどきどきしてしまいました。この間までおむつをしていたのに、この間まで

ママ、ネンネしかいえなかったのに、抱いていた手からするりと抜けていったような気がして、あわてて小さな手をしっかりと握りました。

△「ママ、もう少しあそんでいこうよ」と幼稚園に迎えにいくときまってあとをひきますの。家に庭がないのですから仕方なしに付合うのですが、砂場やブランコでたっぷりあそんでの帰り道、「塀の上から赤いお花がのぞいているよ」とか「あの自動車はなんていうのか」とか「いつもの白い犬が来たよ」とかしゃべり通して家にたどり着くのです。でも考えてみるとその時だけなんです。子どもと本当に話しているのは。

子どもとのなしを記録してみたい気がついたらと若いお母さんはノートを渡してくれました。

△子どもってこちらが手のはなせない仕事をしている時とか、人と話している時にかぎって、「お母さん、お母さん」なん

て勢い込んで話かけて来ますのね。記録してみると、「ちょっと待ってね」とか「あとでね」とかいつていることが多いのでおどろきました。

あとになって「何だったの」なんて聞いても、「何のはなし？」ってげんな顔しますの。その時話を聞いてやっても五分とはかからなかったでしょうに。

二人の男の児をもつ元気のよいお母さんの話です。

。うちの子ばかりじゃない

二歳児ナースリーに来る子どもたちは同じ年齢のお友だちといっしょにあそぶのははじめてという場合が多い。お母さんたちに連れられて遊戯室にはいつてきた時、母も子も戸惑ったよう、すでに堅くなっています。

「うちの子はおとなの中で育ちましたからうまくお友だちとあそべるかしらと心配で」

「商店街なものであそび場がなく今まで家の中ばかりにおりましたので」

「一人っ子でわがままですから仲良くあそべますかしら」

最初はお母さんの心配をそのままに、ママのそばから離れない子、うろろと歩きまわっている子、人のもっている物が欲しくてそばから取り上げてしまう子、ああやっぱりとがっかりした表情のお母さんたちも暫くみているうちに「あらうちの子ばっかりじゃないわ」と明るい顔になっていつもと違った目で

子どもたちの姿をみるようになります。

。いろいろの子どもがある

積木を積んでいたかと思うと滑り台にのぼり、二、三度すべったかと思うとそばの子もっていたボールを横取りしてなげてる。

「本当に落着かなくて恥ずかしいあれだからきらわれるんですね」あきちゃんのお母さんは肩をすくめて見えています。

一つのおもちゃにとりついたらなかなか離れられなくなるのもちゃんははじめから終わりまでほとんど無言です。

「うちではとてもシャキシャキしていますのに」お母さんは考え込んでしまいました。

ほかの子のあそびにふりふりはいつていくゆう子ちゃん。

「あの子弱くて育つかと思っただけです。随分しっかりして来たと思っただけど、まだまだおくられているようですね」

子どものあそびを離れてゆっくり見るといつていことが今までなかったことに気がついたお母さんたちです。

ナースリーも回を重ねたある日、遊戯室で箱車にのったあきちゃんが「もも子ちゃんひっぱってー」と叫んでいます。ももちゃんはあそんでいた場所がらさつと立ち上がってひっぱりはじめました。真赤な顔して力一杯に。それをみてゆう子ちゃんも空車をひっぱり出しました。かっちゃんがいそいでのりこえ

ました。

ガラガラ賑やかな音が部屋一杯にひびき渡ります。いろいろな子がその子なりに成長していることをお母さんたちはほほえみながら眺めていました。

。成長のきっかけ

すべり台でめいめいにすべっていた二人の男の子に先生がちょっと助けを出しました。

「ホーラふみきりよ。閉った時はすべれないの。手をあげたら通ってもいいのよ。チンチンチン閉りました。ストップ！」

先生の腕にはさまれて、あきちゃんがキャッキョと笑う。

「はいあきました、ゴーツ」

勢いよくすべりおるあきちゃん、今度は僕の番と身体をのり出したしんちゃんの前に先生の腕がのびる。

「ワイイ止まっちゃった」

割にスローで自分のペースであそんでいたあきちゃんと、自分の思い通りにいかないとコンチクショーなんていつていたしんちゃんが急にいきいきと、かわりばんこに滑り出した。次のナスリーの時しんちゃんのお母さんは、

「この頃近所のお子さんと仲良くあそぶようになりました。

家の中につれこんでおもちゃを貸したり、こんなことはじめてなんで親のほうがびっくりしました」

そばからあきちゃんのお母さんも、

「お友だちが来ても自分のおもちゃ貸さなかったんですよ。

この頃、お友だち優先になったようです。自分ほうしるに控えてみているというふうで、仲良くあそぶ楽しさがわかったんですね」

子どもの成長がどういっかけて生まれるのかあそびを見ていてお母さんは学んだようでした。

。話合いの中で

「お宅のお子さんはよくおしゃべりになりますね。うちの何をいっているんだか」

「いえ、うちの子もおそかったんですの。でも近所の方にとばは早いおそいがあるから三歳位まで心配しないといいわれましてね、ほんとに急にしゃべり出しました」

「とてもきたない言葉を使いますの」

「うちでも困りまして一度きつく叱りましたら使わなくなりました」

「あれ、もやもやの発散らしいですね」

「うちでは知らん顔してましたらそのうち使わなくなりました」

「まだ夜時々ぬらしますの」

「あらうちの子もです。昼だってあそびに夢中になっていましてね」

お互いの話し合いの中で日頃の心配が軽くなることも多いよ

うです。

芝生でごろごろ

「今日の遠足で一番おもしろかったことなにあに」

「広い芝生でごろごろしたでしょ。みほ子とってもいい気持ちだった」

「ママの作ったお弁当おいしかったでしょ。いっしょにボール投げしてももしろかったわね」

「うん、でも芝生でねるととてもいい気持ちよ」

「公園などにつれていって動物を見にいきましょう。ボートにのせてあげるわね。と、親が一生懸命あそびせている時より雑木林かなんかであそびせておいた方が、ずっと生き生きとしていますね」

「私たち幼い頃疎開した田舎でのびのびあそべたでしょう。

何もなかったけれど。「育ての心」をよんでもよき時代だったんだなあと思います。今お庭のあるお宅大切にしていただきたいと思いますの。眺めて通るだけでもほっとしますもの」

こんな話になるとつきません。子どもが幼稚園に行っている間の僅かな時間一週一度集まって倉橋先生の「育ての心」を少しづつよんでいる若いお母さんたちです。

お母さんのことば——倉橋先生著「育ての心」をよんで

△「疲れてほっとしてけろりとして同じ日を重ねるだけの人」

本当にわたしのこといわれているみたいです。うちのまわり

で子どもの声が聞こえなくなると落着かなくて仕事放り出して見に行くんです。「そちらのほうに行ったらしいわ」なんてお友だちのお母さんに電話連絡したりして。ですから夜になると、クタクタで主人にお茶も入れてあげられない日がありますの。

△あぶないからつい手許であそびせて自分が安心している。汗をかくまで存分にあそべない子、あそびすことのできない親のかなしみかしら

△今朝もね、こちらへ来る積りで一生懸命したくしてしましたら、子どもがね「ママ、こわい目しているよ、もっとやさしい顔になって」というのです。

わたしたちの目に「とげ」はないかという処をよんで冷や汗が出ました

△赤ちゃんが時々キラキラした目で何かじっと見ていることがありますがですよ。

わたしこの頃横になって赤ちゃんと同じ高さでみることにしています。露が光っていたり、カーテンの端がゆれていたりするんです。主人には用事が足りないかと叱られますけど、赤ちゃんのような、いきいきした目や心、私も持ちたいと思って、めまぐるしく変わり落着きをなくしていく社会の渦の中で、より処をもって幼い子を育てていきたい、子どもといっしょにのびていきたいと真剣に考えているお母さんたちの姿です。